

共生社会システム学会ニュースレター

The Association for Kyosei Society

暫定 HP <http://jaks.exblog.jp/>

2006年11月22日発行 第1号

目次

1. 会長あいさつ	1
2. 設立総会報告	2
3. 会員数拡大の呼びかけ	2
4. 次回大会へ向けて	3
5. 会費納入のお願い	3
6. 学会誌『共生社会システム学研究』の発行	3
7. 学会ホームページ	3
8. 運営委員会事務局だより	3

1. 会長あいさつ

女子栄養大学名誉教授 小原秀雄

会長となりましたので、当学会の意義の中心を述べてみたいと思います。ただしあくまでも個人的感想です。

現代の世界には、知的論理的な課題が次々と生起しています。とらえようによれば、その全てが自然・人間・社会・文化的な警告となるものでしょう。

私自身は、最近まで国際自然保護連合（IUCN）やUNEPなどに深く関わっていて、自然と野生生物の示す現実と人間社会、人類史について、特に自分としては何もできないのではと思いつつ、考えさせられてきました。私が考察を加えてきた人間の自己人為淘汰による自己家畜化の論理から、自然との相互関係を構成しなおしたい。人間にとっての「自然な」生活の途へと転換する自己人為淘汰を考えたいと念じているからです。いうまでもなく、人類史は自然史を引き継いで人間化を果たすことで、人間は社会と文化を実現してきました。人間が生み出した道具に由来する「モノ」は、自然から全てを得、自然との関係をつくり、文明を発達させてきました。自然に依存し、社会化して生活ができ「モノ」を生産する。そのような社会の仕組みとその成果である文化との相互関係（ヒトにとっての進化適応）によって、人間の歴史と存在を可能にしてきました。生物としてのヒトであり、同時に社会的人間であるという特殊な生存の実現です。

作り出した「モノ」は言語による抽象的精神世界（二次的反映）までを含めて、全て自

然に基づいて生み出したのですが、現代社会に到るまでに、技術と科学の発展との相互作用により質量共に増大し、改変を重ねてきました。その基本が、速く多くと求める社会システムです。歴史を経てこれを文明化とみなし、先進的とされる発達原理が地球上をおおってきました。これらのすじ途にはそれなりの論理が働き、人間もまた個人の働きや意識から集団の全て、そして国家の政策などとの相互発達や複雑化を経て、多くは次々とその仕組みに組みこまれ、推進してきました。

今日ではグローバルな「発展」の影が地球上全体に広がり、気候変動に見られるように、自然からの警報、病変などが起こっています。この過程は企業社会である先進国で著しい上に、わずか数十年の間に人間の存在は都市生活に見出されるように、自然から幾通りにも乖離し、変化しつつあります。とはいえ、人類史が示すように、人間化・社会化を放棄できない以上、野生生活には戻れません。また人間は人間である以上「自然さ」を別の形で実現する以外に途はないのではないのでしょうか。

現在、国際政治経済はもとより、個々人の生活様式でさえ、たとえば日々口にしている食物や呼吸する大気においてさえ人工化されつつあります。完成された人工化された世界が時と共に人間の自然性までも、それへの適応を強いています。情感や精神をもとりこんでいく強力な流れと思われます。

そこであらゆる面での閉塞からの文明の転

換の必要性は、自然の側から提示されていると思います。国際的な自然と野生生物の保全と、動物と人間（ヒト）の比較生物学から人間存在を考察してきた私は、小さな学会であっても、この重要な、実践性をともなった知的課題を確認しておきたいのです。

自然は人間化社会化されつつあり、自然を生産や人間の社会的営みから、自然のままに

おくことに疑念を持つ考えが多数でしょう。しかし、人間にとって内なる自然と外なる自然との調和を考えるためには、また自然のしぜんな社会化を考える上でも、地球上の自然をしぜんのままに「美しく」保全する重要さも新たな意義を持つのではないのでしょうか。

課題は多様なのですが、一点にしぼって述べました。

2．設立総会報告

10月7日（土）に東京農工大学府中キャンパス講堂にて本学会の設立総会が開催された。記念講演では、語り部・かたりすと・キャストとして多方面で活躍中の平野啓子氏が「語りは心の絵画 地域の伝統文化研究からみた「共に生きる」ということ」という演題で、わが国の伝統文化、特に農村に残る風習・民話などの無形の文化的側面に注目し、共生の1つのありようについて自身の見聞・経験を交えながら紹介した。

「共生社会へのみちすじ」というテーマを掲げた記念シンポジウムでは、小原秀雄（女子栄養大学名誉教授、本学会会長）、古沢広祐（国学院大学教授、同理事）、矢口芳生（東京農工大学教授、同理事運営委員長）の3氏が各人の専門をベースに共生社会システム研究の方向性ならびに課題に関する独自の試論を提起・説明した。各パネリストの演題は順に、「「共生」社会の可能性を人間と社会から考える」（小原）、「共生社会システムへの道 持続可能な社会の形成」（古沢）、「共生社会へのみちすじ 農業経済学の立場から」（矢口）であった。

パネリスト3氏の講演後、引き続き尾関周二（東京農工大学教授、同副会長）と清水本裕（東京農工大学教授、同理事）を座長に、フロアからの質疑応答の形でパネル・ディスカッションが行われた。フロアから積極的な発言があり、当初予定の時間を越えての白熱した議論が展開された。ここでは議論の中身については割愛するが、一連の議論の中で感じた2点を記しておく。第1に、参加者の専

門分野における多様性である。哲学や経済学などの人文・社会科学分野の研究者のほかに、生物学、生態学、農業工学などの自然科学分野の研究者も多数参加し、積極的に議論に加わっていた姿が印象的であった。第2は、参加者が研究者に限定されず、一般市民の参加も見られた点である。豊富な現場経験に裏付けられた実務者の意見や、みずみずしい感性をもつ若い学生からの鋭い質問にパネリストがタジタジになる場面も見られた。こうした自由闊達に議論できる雰囲気は今後とも継続され、名実とも学際的性格を保持しながら「共生社会」について市民とともに考える学会に発展することが期待される。

記念シンポジウム後、本学会の設立総会が行われた。議長に矢口氏が選出され、学会設立準備委員会が作成した会則案にしたがい、1つ1つの会則内容の合意を得る形で議事は進行した。ここでもフロアから積極的な質問・意見があり、学会の英文名称や総会定数等に関しては検討事項として理事会で検討されることとなった。

総会終了後、農工大50周年記念ホールにて懇親会が催された。本学会の発足を祝い今後の発展を祈念するとともに、参加者間では学会の方向性に関して活発な意見交換が行われた。

当日の総会参加者数は174（記帳者数、実際には200人前後の参加者があったと推測される）、懇親会出席者は60名を超え、学会設立総会は成功裡に終了した。（千年記）

3．会員数拡大の呼びかけ

現在、会員は一般・学生・賛助会員を合わせて100名強です。本学会の社会的重要性にかんがみ、今後ますます本学会の活動を充実させるため、是非とも会員の拡大にご協力くださいますようお願い致します。入会申込書は下記の学会ホームページからダウンロード可能ですので、本学会に関心を持ちそうな方が会員各位の身近にいらっしゃいましたら、是非、本学会に参加していただくよう、お声をかけてください。

4 . 次年度大会へ向けて

設立総会で、2007年度共生社会システム学会大会を東京農工大学で開催することが決定されました。2007年2月ごろに発表募集を開始します。詳しいことは2007年2月に発行予定のニュースレター第2号でお知らせします。

皆様の積極的なご参加を心よりお待ちしております。

大会担当理事 野見山敏雄・朝岡幸彦

5 . 会費納入のお願い

早速ですが同封の振込用紙によりまして、2006年度会費の納入をお願い申し上げます。会費は、一般会員 6000 円、学生会員 3000 円、賛助会員 20000 円となっております。よろしくお願い申し上げます。

6 . 学会誌『共生社会システム学研究』の発行

当学会では、年1回学会誌『共生社会システム学研究』を発行します。既にEメールでご連絡しましたが、第1号への投稿締切は2006年12月20日必着となっております。第2号以降については随時、投稿論文を受け付ける予定ですので、会員各位におかれましては奮ってご投稿ください。

投稿規定などの詳しいことは学会ホームページ <http://jaks.exblog.jp/> 内の「投稿規定」(暫定版)を参照してください。また、投稿原稿の執筆および提出の際は、「執筆要領」(同ホームページ参照)に従って作成・提出してください。

投稿についての質問および問合せは、下記、編集委員長 武田までお願いします。

原稿送付先および学会誌に関する問い合わせ先

編集委員長 武田庄平

国立大学法人東京農工大学大学院 共生科学技術研究部 比較心理学

〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

E-mail takeda@cc.tuat.ac.jp TEL & FAX 042-367-5588 (ダイヤルイン)

7 . 学会ホームページ

学会ホームページ(暫定)を立ち上げました。アドレス(URL)は <http://jaks.exblog.jp/> です。ホームページには「加入の呼びかけ」「設立趣意書」「設立総会の記録」「会則(暫定)」「役員名簿」「投稿規定」「執筆要領」が掲載されています。ご自身のホームページをお持ちの会員は、是非、学会ホームページへリンクを張っていただき、アクセス増加にご協力ください。また、学会ホームページ充実のために皆様からのインプットを歓迎します。ご意見等がありましたら、中尾誠二(nakao@kouryu.or.jp)までお知らせください。

8 . 運営委員会事務局だより

2006年10月18日に東京農工大学にて学会運営委員会が開催されました。設立総会で指摘された会則に関する事項、学会運営方針・活動計画ならびに学会員拡大などの検討が行われました。会則の修正案は2006年12月17日に開催される理事会で審議される予定です。会則に関する決定事項は、次回のニュースレターにて皆様にお知らせします。

今回は第1号のニュースレターということもあり、Eメールによる配信に加え郵送もいたしますが、第2号以降は予算上の都合もあり、原則的にEメールによる配信のみとさせていただきます。その旨ご了承ください。ニュースレターはホームページ上にも掲載される予定です。

学会のロゴマークを募集しております。良案のある方は、是非、学会事務局(千年篤 chitose@cc.tuat.ac.jp)までお知らせください。

いよいよ学会活動がスタートしました。不慣れな事務局で不手際なこともあるかと思いますが、温かい目で見守っていただければ幸いです。ご支援、ご協力の程よろしくお願い致します。

会長 小原秀雄 (女子栄養大学)
 副会長 尾関周二 (東京農工大学)
 水本忠武 (宇都宮大学)
 運営委員長 矢口芳生 (東京農工大学)
 運営副委員長 千年 篤 (東京農工大学)
 編集委員長 武田庄平 (東京農工大学)
 編集副委員長 岡野一郎 (東京農工大学)

編集担当理事 古沢広祐 (国学院大学)
 中川光弘 (茨城大学)

地区担当理事
 東日本 山崎亮一 (酪農学園大学)
 坂下明彦 (北海道大学)
 柏 雅之 (茨城大学)
 長野 敬 (自治医科大学)
 津谷好人 (宇都宮大学)
 河路由佳 (東京外国語大学)
 亀山純生 (東京農工大学)
 清水本裕 (東京農工大学)
 里深文彦 (東京農工大学)
 小野直達 (東京農工大学)
 島崎 隆 (一橋大学)
 星 勉 (JA総合研究所)
 日野昭男
 (まちむら交流きこう)
 西日本 上野吉一 (京都大学)
 種村完司 (鹿児島大学)
 仲地宗俊 (琉球大学)

大会担当理事 朝岡幸彦 (東京農工大学)
 野見山敏雄 (東京農工大学)

監事 後藤光蔵 (武蔵大学)
 長濱健一郎 (秋田県立大学)

日本農業新聞
 2006年10月8日 2面

「共生社会」探る

学会が 市民参加呼び掛け

「共生社会システム学会」が7日、発足した。人と自然、都市と農村などの共生を幅広く研究し、実践に結びつけるのが狙い。設立総会を東京都府中市の東京農工大で

開き、女子栄養大学の小原秀雄名誉教授を学会長に推した。まちづくりなどで共生の理念を实践のため、市民や民間非営利団体(NPO)にも学会への参加を呼び掛ける。

学会は、東京農工大学の教授らを中心に、各大学や試験研究機関など約80団体から50人以上が呼び掛け人となり発足した。今後、学会誌の編集のほか、研究成果の発

表・討論会、シンポジウムの開催などを開き、「共生社会」を築くための具体的な活動や、市民どうもに考えたい。

共生社会は、市街地裡や効率重視の社会とは違って、人と人とのつながりや自然環境を重視する社会。農業・農村でも地域活性化のために取り組む活動や、環境に優しい農業を進めるには、共

生の理念の具体化が必要になってくる。

同日は、学会設立を記念したシンポジウムも開かれた。動物学が専門の小原名誉教授は「人と自然が共生する理念を、具体化する道筋を研究するのは価値がある」と述べた。討論では共生社会の具体化には、市民やNPOが積極的にかかわる重要性が指摘された。

「共生社会システム学会」運営委員会事務局
 矢口芳生(運営委員長)
 秋山満、安藤光義、稲村亮、千年篤、
 中尾誠二、中島正裕、吉田央

共生社会システム学会ニュースレター 第1号 2006年11月22日発行
 編集・発行 共生社会システム学会運営委員会事務局
 連絡先 〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8 東京農工大学農学府 千年篤研究室 気付
 TEL: 042-367-5687 E-Mail: chitose@cc.tuat.ac.jp